令和６年度第２回京都府総合教育会議

１　日　時　令和７年１月 24 日(金)　午後２時 00 分から３時 30 分まで
２　場　所　京都府公館　第５会議室
３　出席者　西脇知事、前川教育長、小畑育委員（教育長職務代理者)、
　　千教育委員、安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員
４　次 第
（１）　開会
（２）　意見交換
（３）　その他
（４）　閉会

１．開会

〇出席者紹介

〇知事あいさつ

皆様こんにちは。本日は本当にお忙しい中、総合教育会議にご参集いただきまして誠にありがとうございます。

この会言うまでもなく、教育委員、皆様と私どもで意見交換する場でございまして、意見交換を通じまして、現在の京都の教育行政の、現状とか課題を共有した上で、今後、連携して実行していくような教育条件の整備とか施策について、議論を進めてございまして、本日も、忌憚のないご意見を賜りたいと思っております。

今日のテーマはですね、昨年の２月に京都市長に松井孝治さんがなられて、これまでの京都府京都市の府市連携については、年に１回、府市懇談会と称して、直接意見交換をしてきましたけれども、もう少し、府市連携のレベルを上げたいということで、府市懇談会から府市トップミーティングと変えて、しかも開催も年１回ということじゃなくて、機動的にですね複数回にということで、もうすでに今年度は３度、トップミーティングをさせていただきました。

その中の紹介でまず、方向性を合意する事項が、京都府立高校と京都市立高校の、探究学習の合同化ということでございまして、高校生の探究のパートナーシップと言っておりますけれども、これも来年度以降も継続して実施していこうということで、お互い確認したところでございます。

今年度の取り組みということで、昨年の 12 月 21 日に、京都探究エキスポを開催いたしまして、発表する高校生は 400 人台だったんですが、当然、見学する高校生の方とか、あと中学生も、保護者も含めて、それから、教育行政の関係者とか、あと経済界も含めて、1,100 名を超えるような方にご参加をいただきまして、開催をさせていただきまして、当日は日本の AI 研究の第一人者であります東京大学の松尾先生と、京都大学の谷口先生に講演とか講

評とか、パネルディスカッションをさせていただきました。

まずは、教育委員会の皆さんにおかれましては、短期間で準備をしていただいたことを、心から感謝を申し上げたいというふうに思っております。

松井市長との府市トップミーティングの中でも、高校の探究学習の合同化もありますが、それをいずれ高大連携とか、高校と経済界とか企業との連携とか、そういうことにも、さらに広げていこうというようなことも話しておりまして、それが、１つの課題であります。将来的には、大学生の府内定着にも長い目で見れば繋がるんじゃないかなというふうに思っております。

そういうことで、今日はその辺りにつきまして、ご意見を賜りたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

○前川教育長あいさつ

教育委員会を代表して、ご挨拶申し上げます。

令和６年度も残り２箇月となりまして、学校現場の方では、進路決定の時期、あるいは卒業式に向けた最後の教育の仕上げの時期を迎えております。

先日、府立の中学校の入学者選抜を終えましたけども、これから高校生の入学者選抜に入って参ります。

そんな中、京都の高校生、府立市立を問わずですね、そのスケールメリットをさらに生かして、それぞれの特色の強みを、さらに切磋琢磨するような形で何かできないだろうかということで、今、知事からもご紹介いただきました京都探究エキスポを 12 月 21 日に開催させていただきました。

私が当初思っていましたよりも、多くの学校、多くの高校生、そして、それを見に来てくださった方の規模も大変大きくて、そして反応としても、普段交流をしている学校以外のジャンルの生徒の発表が聞けて、大変参考になったというような、非常に高校生からの評価も高うございました。

今、当然のことながら変化の激しい社会で、多様性がさらに進んでいく中で、教育の充実を図るためには、高校だけにとどまらず、大学との連携、あるいは企業との連携というのがこれから必須になってくるというふうに考えております。

その中、今日、それに関するテーマで、総合教育会議を開いていただきました。

それぞれの教育委員の皆様からも、忌憚のないご意見をいただいて、そしてこれからの方向性というのを、考えていければというふうに考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○「高校における府市連携・高大連携・企業連携」～概要説明

（総合政策環境部　岡本部長）

（商工労働観光部　河島企画調整理事）

（教育委員会　相馬指導部長）

〇意見交換

（西脇知事）

それでは、意見交換を始めたいと思うんですが、ちょっと前半後半で分けさせていただいて、今日の主題であります高大連携とか企業との連携は、後半に御意見いただくとして、まず、今年度、初めてやりました府立高校と市立高校の合同の探究学習について、今年度の取り組みを若干紹介されておりましたけれども、だから、これまた、来年度以降もですね、拡充等して継続したいと思っておりますので、まずは、この府市連携事業について、評価とか、探究をやることとか、それを発展させていくためにはどういうことからしたらいいのかとか。

私も全部の発表は、聞けなかったんですが、面白かったですよ。

カニは前に歩けるのかっていうのが、私一番印象に残ってるんですけど、歩くんですよ。一定の条件を与えるとですね、横歩きじゃなくて、まっすぐ歩くとかですね。

ドイツの教育を学んでる子供たちが、ドイツで10代の前半ぐらいにもう仕分けがされてですね、こちらの方は職人に行くと、職人のレベルがすごい高いんですけれども、高等教育に行く人達というのをかなり早い段階で分ける、それについては、こんなん嫌やって言ってますという皆が、そういうのを勉強してるとか。

あと丹後の方で、たたら製鉄をっていうことで、たたら製鉄を再現しようとした探究学習を発表して、私が平安時代の前から組んでやったと思うよって言ったら、すいません、そこはまだこれから勉強します、とかね。

なんか、結構、大学生とか企業の方もいろんな質問をされたということで、これは前からもちろん探究学習やってる成果のとこなんですが、それより、幅広くなったかなとかいろいろな感想を持ちましたんですが、この辺り、まずは今回の取り組みについて、感じられることがあればお願いします。

（小畑委員）

私もですね、イベントは午後に参加をさせていただいて、パネルディスカッションを聞いたりですね、それからものすごいたくさんポスターセッションが出てて、そこをちょっと回ってですね、発表してる生徒さんの意見を聞いたり、行ったりして、非常に面白かったですね。

府市で連携するから、あれだけの規模の集積ができるということで、それが１つ府市連携であることの意味なのかなと、子供にとって府も市もないですからね、こういうふうにやるのがいいですよ。

教育委員もね、府と市の教育委員っていうのは、毎年２回ぐらいかな、一緒に交流してるんです。一緒にスクールミーティングしたり、懇談したりしてるんだけども、ああいう府市

の教育委員の連携の中から、ああいうイベントのアイディアが出てこなかったというのは、ちょっと反省点でありますね。

パネルディスカッションとか、松尾　豊先生のＡＩと教育と社会みたいな話ね、結構難しい話だったんだけど、あれ聞いてね、本当に面白かったですよ。

すぐに、私もですね、松尾　豊先生の本を２冊、Ａｍａｚｏｎで買って、勉強させていただいておりまして、そのあと、パネルディスカッションで、高校生が４人から５人出てきてますと松尾先生とディスカッションするんだけど、議論なんか聞いててもね、結構難しいテーマなんだけども、私パネルのとこだったら何を言おうかなと思うような感じなんだけど、堂々と自分の意見を言ったり、質問したりしてね。

なかなか、最近の高校生っていうのはこういう、そういうことに、物怖じせずに発言する、そのベースがあるということで、これなかなか大したもんじゃないかなと思いましたね。

その前の週かなんかにね、私、舞鶴の和田中学校というところで、スクールミーティングっていうか、その探究型学習を見たっていうかね。

あれはね５人ぐらいの生徒がグループを作ってですね、そこにね、学校の先生が入って、学校のいいとこ、悪いとこっていうようなテーマでね、議論するんですよね、私が入ったの、私と校長先生が。で、校長先生がいるところで、学校の悪いところって、なかなか言いにくいんじゃないかなって、僕なんかは思うんだけど。意外とそういうのは気にせずにね、はっきりといろんなこと言うんですね、そうすると、校長先生もね、非常に寛容にね、うんそうだよね、とかってね、やってくれるんですね。

ああいうのはね。やっぱり、ああいう探究型の、なんかいうグループディスカッションのある手法があって、それを学校で何回もやってるから、けっこう手馴れているのかもしれないですけども。

いや手馴れたらいいんですよね、それは教育だから。自分の意見をしっかりと言って、その当事者の前でも、しっかりと発言するっていうのはね、非常に素晴らしいことだなというふうに思ってます。だから、その時も、中学生もしっかりしてるなと思ったけど、この間のイベントでは高校生はもっとすごいなと、こういう印象ですね。

それはね、やっぱり教育の積み重ねだしね、それから、探究型学習ってのはかなりこう、定着してきたし、教育としても、いろいろ進化してきてるということの、その何ていうのかな、現れなんじゃないかなっていう感じがしますね。

実は、府の教育委員会では、コンテストってやってましてね、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」ね、いうのをやってまして、来週から再来週かな、年に一遍やるんですけどね。

これは中学生が幾つも大学とか、企業とか、ＮＰＯなんかが、提示したテーマについてで、その解決策を自分たちで考えていく。その考えるプロセスにおいては、学校の先生も指導するけども、テーマを出した大学とか、企業の人がかなり、手突っ込んでですね、それで指導していくんですね。

だからコンテストに出てくるのは、かなりの勝ち上がったチームなんでね。これもね、こないだのイベント、高校生だからあれだけど、この中学生としてもね、非常にね、しっかりした、年々、しっかりした発表にね、なってきてるように思います。

だから、探究型事業学習っていうのは、そういうふうに何とか、今の企業とか、あるいは団体とか、大学が持っているいろんな課題を与えられて、そこの人、当事者と、いろいろ議論をしたり、指導を受けてね、その解決策を、見いだしていくっていうことだから、まさに生徒さんにと生徒にとってはですね、実社会とか実用の実際の世界にグーッと首を突っ込んでね、見ることができると。そういう意味でね、非常に学習じゃないかなと思いますね。

ただ、チャレンジコンテストのテーマも、企業のテーマは、主として、やっぱり大企業とかね。地元の中堅企業なんですよ。本当はね、地元の中小企業、のテーマがね出てくると、もっとその生徒が、その地元の中小企業の理解を深めて、それじゃ地元で、とかっていうような気持ちになってくるんじゃないかと思うんだけど。これはね、なかなか難しいと思う。難しいんじゃないかと思う。

つまり、中小企業にはそんな学習を指導したりする人材もいないし、時間もないから。だからだけど、そういうテーマをやっていくってのは、やっぱり地域との連携とか、その地域、地元に戻っていくとかっていうことのベースになるから、学校にとってはちょっと負荷が高くなっちゃうかもしれませんけれども、大事なことだから、しっかりとそういうことをやっていくということをすると、学校と生徒と社会、生徒と企業、そういうものの結びつきがね、強くなっていて、それがゆくゆくは、就職、幅広い就職に繋がっていくんじゃないかなっていうな感じがしております。

こういう府市連携のイベントをさらに、進化させて、やっていきたいと思います。

（安岡委員）

安岡でございます。

京都探究エキスポですか、これは、本当に府市協調があってこそのトップミーティングでこれは決まったということでありますし、この中でやっぱりスケールメリットも大事だというので、やっぱり京都府の府立高校というのは、やはり京都市内にはあるけれども、やっぱり府と南部と、南部と北部にある、まだ京都市というのは、そこの中に京都市の中に限定されてるということで、その中でやっぱり地域性を求めたような、色んなことを考えるというの、何か例えば、ものすごくいいのかなというふうには思う次第です。

プロ・アマの火まつりの継承をどうしていくかっていう、のが出てたと思うんですけれども、その中で次世代に向けてどうやってそれを継承していくかっていうこと、そういったところをですね、地元の場ではやっぱりしかわからないようなイベントっていうものをね、もっともっと、その中で掘り出してきて、別に、京都の市内の子が別に北部の探究をしてもいいわけだから。ぜひ、そこのやっぱり地元に帰るっていうのは、基本的に、帰巣本能もあんのかなというふうに思うわけですけど、その中で、別に京都市内の子供たちが北部または南

部の史跡・名勝とかにも心を奪われることもあるだろうし。

逆に、北部の子供たちを京都市の中で、またＩＣＴとかね、ＩＴとかね、Ｓｏｃｉｅｔｙ 5.0 の中で、ロボット、ＡＩ、こういったビッグデータに基づいたようなこういう話を聞いてその中で、こう発展していくというのが大事かなっていうふうには思う次第です。

こういう、イベントは、本当に、今までもっともっと、やっていってよかったことかなと、いうふうに思いますし、単位的に考えれば、やっぱり京都は細長いところですから、この地域の活性化を含めて、これからも必要でありますし。

この 400 名の参加というのが、私は、一堂に会してと書いてあるけど、400 人というのが多いのか少ないのかっていうところが、やっぱあると思うんで、またそういった中で、機会があればいろんなところで開催をしていくっていう、地域も考えてもいいのではないかなというふうには思います。

（鈴鹿委員）

本当に皆様おっしゃった通り、府と市でこうして府と市の生徒さんが同じように、こういう特にＡＩですとか、今、多分、高校生も中学生も興味があるような、分野の話を聞くことができる。そういう機会が全員にあるというのは、とても素晴らしいことだなと思います。

小畑委員もおっしゃっいましたように、おそらく生徒さんにとったら、府と市もあんまり関係ないと思われてるかもしれないんですが、やっぱりこういう事によって、自分たちの学校の周りのことだけではなく、いろんな地域が抱えてる課題も知ることができますし、またそれぞれの学校で、おそらく、それぞれのやり方があると思います。

私も、スクールミーティングで、いろいろ寄せていただくと、この学校でこういう学びがあるんだなとか、先ほど小畑委員のお話にもありましたような、和田中学校も行きましたけれども、そこでは常に探究をしていて、生徒さんたちもディスカッションや意見を言うことに慣れているですとか、学校ごとの特徴があるので、それぞれの学校の、やり方っていうのを刺激を生徒さんも受けて、またこれを通して、もしかすると先生方ですとか、他の学校に学ぶことというのもできてくるのかなというふうに思いました。

私の最近の生徒さんへの印象としてはスクールミーティングを通してですとか、あとちょっと先日も所用で小学校の方とかも言ってたんですけど、小学生とかも、特に、自分から発言をする方っていうのは増えてるのかなと。そういう授業のやり方をしてきているからか、すごく手を挙げて、言いたいという気持ちが出てると。そういうのをつぶさないようにこういう発表の機会とか、大人がきちんと聞いてくれる機会というのがあると、どんどん、探究もしていくし、発表するのにも物怖じしないようになるかなと思うので、これは大勢の前で発表していくという機会っていうのは、ぜひ続けていただければなというふうに思います。

（藤本委員）

失礼します。皆さんおっしゃったことと大分重なりますけどもこうやって、初めてのことにチャレンジされたということが一番すばらしいことだなというふうに思うんですね。

先ほどもお話ありましたけども、やっぱり、高校生だけではなくて、中学生もあるいは教育行政の方や、企業の方もということで、保護者の方も含めて、各色んな分野の方が参加されるっていうことも素晴らしかったと思います。ただ、その中で、今後というところに繋げる意味では、おそらくされてると思うけど、やっぱり、そこでのいろいろアンケート調査であったり、さらにこうしたらよかったみたいなことを、各分野の方から、万遍なくですね、学校とか、行政レベルだけで考えなくて、むしろ、私は、その生徒さんですね、あるいは、企業さん、そういう方たちの意見を、やっぱり丁寧に聞き取っていくのが大事なのかなっていうのが１点思いました。

もう１つは、そもそもこのイベントをですね、エキスポをなんのために、やるかっていう目的を、しっかりもう一度確認をしていくことも必要かな。つまり、もう本当にもっとスーパーサイエンス的なところを、どんどんどんどん伸ばしていくのか、あるいは、各学校の日頃の学習意欲なりを高めていくことも目的とするのかによって、それそれぞれまた違ってくると思うんですね。

こういう取り組みっていうのは、言い方悪いですけど、最初割と食いつきいいのかもしれないけど。何年かしていると、また、あそこが良い発表してる、またそこへ常連さんがいてですね、いわゆる学会ってそうだと思うんですよね。

やっぱ、あの先生また発表しているみたいな、一定の、本当に、その学校は素晴らしいんだけども、その一部の学校だけが、何か意欲的に取り組むような形になるのは、やっぱ避けるべきだし、そのためには、２回目３回目どうしていくかっていうところがすごく、大事なところになってくるのかなっていうふうに思います。

そう考えると、なかなか難しいんですけども、やっぱり、それぞれの学校の課題っていうのは、違うと思うので、みんなが一律にやる必要はないし。やっぱり、その学校さんの学校の頑張りっていうものをうまく、評価してあげるようなこと、或いは、これは、当日がどうしても注目浴びるし、当日はとても大事なんだけども、やっぱりそこに向かっていくまでのプロセスですよね。まさに。学校の教育課程というものがここにやっぱり生かされていくみたいな。そういう学校全体のそれぞれの課題特徴が、さらにこのイベントで強化されるような、そういう存在に、この当日がなるためには、どういうゴールイメージスケジュールでトライアルしていくのがいいのかっていう。それは、それぞれの学校がやっぱり、違うと思うんですよね。その辺が、やっぱり今後のまた課題なのかなって。でも、すごく、こう可能性いっぱい持ってると思うんですよね。

そういう意味では、ちょっと違うかもしれん。学会でも、結局なんか同窓会的な、側面って結構あって、そこで、学会で結局ポスター発表するのもすごくいいんだけども、そのオフのときに、最近こんなことしてるよとか、あの人面白いよみたいな情報交換、こういうのを高校の先生同士ができるようなオフ会の仕組みみたいなのを、何か上手く作ると。

なんかそういうところで、そんなことできるんやなとかっていうのを、もっと広げていけば、生徒同士のオフ会みたいなもできるといいのかもしれないけど、何かこの当日に向かっていくこと、あるいは、それを終えてからのところに、ものすごくいろんなことを取り組める可能性があると思うので、そこは、色んなお知恵、アイディアをね、使いながら、できるともちろんそれは対面がいいけども。対面ができなければ、Ｗｅｂで会議だってできるわけですし、そんなふうな、１回ぽっきりの打ち上げ花火で終わるのは、とてももったいないと思うので、そういうふうな、活用の仕方っていうのは、今後ますます、大切にしていただけるといいのかなというふうに思いました。

ちょっと私は、ごめんなさい。当日はどうしても急用ができまして、参加できず。偉そうに言ってますけど、当日参加できずに、大変残念でした。

（千委員）

多分、今回はこのＡＩとか先端がメインテーマというか、講演があって、このブース発表とね、それに限らず、いろいろあったということなんですよね。このチラシを見る限り。

ですから、このテーマは、回ごとに変わっていくのかなとは思いますけれども、もちろん、この理数系の先端を行くようなことも、とても大事だとは思いますけれども。

もっと他に、歴史であったり、何だったり、その回によって、テーマが違ってもいいのかなと思いますし、さっき安岡委員もちょっとおっしゃってたけれども、京都の何かに限った回があっても、いいのかなと面白いのかなと。

先ほどから話が出てますけど、スクールミーティングなんかに伺っても、小学生から、グループで話し合いをして、発表してください、ていうところが多くて。

自分のことなんか考えると、ただただ静かに先生の話聞いて、指されたら、渋々答えるみたいな時代に育ったので、やっぱりその、発表力というのが、各段に、子供たちは発達してると思うので、こういうことも、さほど困らずに、できるんだろうと思うので、とてもいいことだと思いますし、はい。

400 人が多いような気もしますけれども、少ないような気もしますので、もうちょっとそれぞれの学校に、浸透させていけるようなものになればいいと思います。

（前川教育長）

冒頭の挨拶の中でも少し申し上げましたけども、今回の探究エキスポ、私が、事前に予想していたよりも遥かに、よかったと思います。手前みそですけど。

もう１つは、もちろん想像していた以上の発表数があった、参加校数があったという規模感もございますけども、生徒たちが実行委員会を組んで、当日の運営等もですね、自分たちの手でかなりの部分やってくれたっていう、そこの部分を見落としてはいけないなというふうに思います。

来年度以降の充実・発展ということを考えていったときに、そういう生徒たちの持ってる

力をいかに生かしていくかっていうことが、１つ、鍵になるのかなあというふうに思います。
　これまで府の方で言いますと、先ほどご紹介のありました、府立高校の特色を４つに分けて、グループごとの発表会をしておったんですけども、府立高校全体で発表会をするという発想すら、恥ずかしいですが、私は思っておりませんでした。
　今回、京都市と一緒にやるということで、一緒に連携をするっていうことは、規模だけではなくて、こんなに質も高まるんだということを、改めて、生徒たちから教えていただいてもらったような気がします。
　そういうことで言いますと、他の委員もおっしゃってましたけど、これは年末の１回の発表会の単発で終わらせるのではなくて、いかに、こう積み上げていけるような継続性を持った学びにしていけるのかっていうのが、次年度以降に向けて、我々が考えていかなければならない。
　その中には、生徒の意見を取り入れながらですね。
　京都府はやっぱり南北に長い県ですので、生徒たちがみずからの意思で意欲的に参画できるような工夫っていうのを、我々が大人もやっぱりしていかなければならないなというふうに思います。
　それともう 1 つは充実発展ということで言いますと、やっぱり広がりをいかに作るかということなんですけども、それは規模感の広がりもありますし、テーマの広がりっていうのもあろうかというふうに思います。
　通常、各学校でやってます探究的な取り組み・学びというのは、どうしても、その中学校におられる先生方の専門領域に影響を受けることが多くございます。
　ですから、私も洛北高校におりましたけども、やっぱり洛北高校の先生方の専門領域に影響を受けて、自分たちもこのことを研究しようっていうようなことがやっぱり多いんですね。実際にもやっていくんですけども、取っ掛かりがやっぱりそういう影響を受けやすい。
　ところが、こうやって多くの学校が府市の枠を超えて組みますと、他校の先生の専門領域なんかについても関心を持てるわけですね。
　特に、今、府、私どもの方で進めてます学校の枠を超えた、どこでもスペシャルとかですね、まだ実験的に始めたところですけども、Ｗｅｂラボとかですね、Ｗｅｂはこういう ＩＣＴを使って、子供たちが空間上で学びを共有できるような、取り組みを府市と一緒にやっていくとかですね。
　偉そうなことがいえるところまで私たちも進んでおりませんので、もうちょっと実証実験を進めてから提案をしたいと思うんですけども。そういう広がりを、今後いかに作っていくのかなというのが鍵となるかなというふうに考えております。以上でございます。

（西脇知事）
　どうもありがとうございました。
　かなりいろんな子細な提案いただきまして、ありがとうございました。

もともとちょっとね、４月の府市トップミーティングで言い出して、ということだったので、本当に、教育委員会の皆さんには、ご負担をおかけしましたんですが、今のいろんなご提案を私が処理するというのは、前川さんに処理していただけいけないことが多いんですけれども。

私いろんなことをね、感じたんですけれども。１つはですね、やっぱり私と市長が、どちらかというと先に飛び出しますので、両教育委員会が仲良くなったということが 1 つあるかな、という大変な効果もあったのかなというふうに思うんですけれども。

ちょっとポスターセッションのところ、千委員もおっしゃっていた松井教授のテーマのところ、別に、一緒なわけではないのと。

それから、もともと探究学習の非常に積み重ねのベースがあったんで、今回やったが、レベルが高くなっただけじゃなくて、もう今までも非常に様々な積み重ねがあった上に、今回きっかけになったと、実行委員会の話もありましたけど、生徒さんたちの話聞いてると、次は自分たちでテーマを決めたりとかですね、いろんなこともおっしゃってましたんで。

テーマを広げて、地域の広がりとかっていうのは、課題なんですが。いずれにしても非常に、前向きに生徒さんたちもとらえていただいたかなというふうに思ってます。

鈴鹿委員もおっしゃってました自分から発言する子が増えた。

ただですね、スタートアップとか、ベンチャーの若い起業家の方から聞いて、ほとんどの人間が、京大発とか京都の人で、東京に行ってプレゼンをして見てみたら、東京の奴のプレゼン、うまって言うらしいんですよね。

何かを発表するとか何かっていう場合は、もう本当に、どんどんたくさんあった方がいいんじゃないかなということも思っておりますんで。どうなるかは別にしても、広がりを持ちたいし。松尾先生を選んだというのは、AI に関する世の中の流れがあまり早いんで、京都大学の谷口先生は、今年度から京都大学にっていうことで、東西の AI の一人者が、一堂に会してる、この松尾、谷口が集まれるのは、実はこの日しかなかったということもありまして。そういう意味で、ポスターセッションとは若干違ったんですけれども。

日本での最先端の議論を、生徒たちに聞いてもらった方がいいんじゃないかなということで、そういうことになりまして、まだまだ、様々な観点で発表の余地があると思っておりますので、大変なんですけれども、大事に育てていっていただければありがたいと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

それではですね、２つ目のテーマが、高大連携と企業連携なんですね。

これは、もともと府市連携の流れの中で、私と市長との話の流れでいうと、やっぱり高大連携しようとか、企業との連携しようと思うと、公募が学校側の方もある程度まとまらないと、単発ではですね、なかなか大学もあるんですよ。

もし企業なんかで言ったらそしてあれば、こっちの方もちょっとまとめるということであれば、高校の府市連携の中の、次のステップとして、そういう場面であれば、より、高大

連携とか企業連携が進められるし、またもっと進めるべきじゃないかという思いがあるんですね。

ただ、これは先ほど教育委員会なり、うちの部局からも説明しましたように、すでに、今までからも、いろんな取り組みをしてますけれども、ちょっとこれ、どういうことやってるかという説明があったんですが、あんまり、ボリューム感として、十分なのかどうかってのはよくわからないところがありまして。

例えば、Amazon が詳しいので、シリコンバレー、うまくいってると言って。明らかにスタンフォード大学がですね、あらゆる企業と、大学１、２年生の時から連携してるようなことになっちゃってますし。

これちょっと相馬部長に後で教えてもらいたいんですけども。

文部科学省が、最近、高専とか、工業系の高校の生徒が、地方の、京都はちょっとまだ分析してないんですけど、地方の高校って、全部、首都圏とかね、高校生が引き抜かれてるみたいな、就職先としてね。金の卵なんだという問題意識があって、

もっと地方で、地元企業がもっともっと高校に入るような形での予算措置を令和８年でしたいみたいなことがあって。ちょっと、岸本知事からも、私になんか一緒に運動してですね、もっとやらないかみたいなことも出てきてですね。

最近の動きとしては、できるだけ早い時期から、企業・産業とか経済に触れるべきじゃないかという議論もあってですね。ちょっと府市連携の文脈だけじゃないんですけど、そのあたりですね、大学連携、高大連携、企業との連携についてどのように進めるかも含めてですね、誠に、小畑委員の方から、申し訳ございませんが、よろしくお願いしたいと思います。

（小畑委員）

高校と大学の連携ということで、申し上げますと府大と農芸高校の連携っていうのが、いよいよ実際にスタートしますよね。

あれなんかは、設置者の違う大学と高校が、どっちが上下関係なくですね、それぞれの自主性というのを尊重し合いながら、強固に連携をしていこうという、そういうスキームだというふうに思ってるんですけども。

この間、たまたま府大の塚本先生とちょっとお話をする機会があって、この話も話題になったんだけども、先生おっしゃるようにですね、農芸高校の生徒っていうのは、英語力とかね、そういうところでちょっと問題もあるんだと。

だけども、その高校３年間でじっくりと農業とか、畜産のことを勉強してきた学生っていうのは、３年生の専門課程に入ると、そうでない学生と比べてものすごく伸びしろが大きいっていうんですね。

だから、先生から見てやっぱそういうところがね、農芸高校と連携することの、非常に大きなメリットっていうか価値なんですよって、あるいは期待してるとこですよっていうことをおっしゃってたんですね。

ということは、その高校のときに、ある種の専門性をきちっと、じっくりと勉強していると、大学に入って、その専門性っていうのが、ものすごく伸びていくと、こういうことだと思うんですね。全て、どの専門性もそうだとは思わないんだけども、だから、どういう専門性を対象にして、連携をしていくのか。

だから、大学に入ってそういうふうにグーッと伸びていくためにはですね、高校のときにどういう専門性の教育をしたらいいのか。

こういうことをね、包括協定を結んでいるような大学と、研究して、そして進めていくと、いわゆる専門性を伸ばしていくような教育をね、高大でまさに連携してやっていく、そういうことをね、やってみたら非常に面白いんじゃないかなっていうふうに思いますね。

そういうふうにすると、今回の、府大と農芸高校のような形の、農業とか畜産がそういうのでどう伸びていくんでしょうね。

おそらくね、なんて言うのかな。デジタル技術とかＡＩの技術とかＩＣＴの技術、少しプラグテックなね、専門性技術ってのはね、同じようにね、できるんじゃないかと思いますね。

だからここ、大いにそういう先端の専門性で、高大連携をどういうふうにしたらいいのかって研究して、早めに実践をしていくと、非常に面白い結果が出るんじゃないかなっていう感じがしてます。

校種間の連携っていうのは、高大に限らずですね。中高、小中、それから、幼保と小学校とかね。あのね、全部あるんですよね。例えば、幼保教育をしっかりやれば、社会的情緒性が研ぎ澄まされて、そのあとの中学とか高校に行ったときの、いじめがだとか、不登校の予防になるってな話もあるし。それから、キャリア形成も進んで、しっかりした就職をしていくんだっていうなことがある。つまり、川上の教育っていうのは、ずっと川下にずっと効いててくるっていうことだと思うんですね。

ということはね。今は、その小中とか中高の連携っていうのは、結構実績ができてきてるわけで。そういう実績をベースにして、私なんかはその幼保から大学までのね、公立の一貫教育みたいなことにチャレンジしてみたらいいんじゃないかな。

そうすると、本当にまさに川上の教育が、どう川下に流れていくのかって、ずっとそれをね、整合したら、もう大変面白い教育ができるんじゃないかなというふうに、ちょっと思ってるんですね。

私立の場合は、すべての校種を自分ところの傘下に置いてるから、ものすごいやりやすいと。だから結構いっぱいありますよね。一貫性教育のところ。

公立の場合はそれぞれの学校が、なんて設置者が違う。だから、これに縦串を入れるっていうのはね、なかなか難しいところがあるだろうと思うんですけれども。

その縦串を入れたのが、府大と農芸高校の縦串ですよね。

そういうような縦串の事例をモデルにして、なんか公立の一貫教育みたいなことをやっていくと、私立の一貫教育とは違ってね、より何かこう、緊張感のある、一貫教育ができて、少し特徴のある一貫教育ができてね、教育の効果も大いに上がっていくんじゃないかなと

いう感じがありますし、そういう一貫教育っていうのは、最近の、最近じゃないかもしれんけど、保護者のニーズでもあるというふうに思うんでね。１回ね、そういうことにチャレンジしてみたら面白いんじゃないかなという、感じがありますね。

それから、その何だろう、今の設問の中の、高校と経済界とか企業との連携ということでいうと、さっき私が申し上げたように教育としては、探究型の学習の中で、そういうテーマを入れて、企業も一緒になってね、チャレンジコンテストみたいにね、指導してやっていくっていう教育っていうのはね、非常にそういう意味で、生徒が、産業界とか実業の世界のことを知っていく上で、非常に良い学習だとね。何よりもね、あの学習がいいのはね、生徒が自主的に非常に楽しそうにやってますね。

聞いてくと授業って面白くないけど、ああいう探究型学習ってのはね、面白いっていうんですよね。もちろん、授業で基礎学力をきちっとしておかないと、探究型学習もうまくいかないから、その両輪はきちっとバランスよくまわしていかないといけないけども。

ああいう探究型学習ってそういうふうに自主的に楽しく、実業ちょっと社会のことも肌で勉強できる。そして、発表すると、高校、その生徒の潜在力がなんかこう顕在化するようなね、本当にいい教育だなと思って。これはぜひ、さらに進めていくことが大事じゃないかと思いますね。

それから、最後にちょっと知事がおっしゃった、なんでこう、京都で勉強したやつが、京都に残らないんだっていうようなことで。あれ、問題はやっぱし、中小企業に行かないで、ほとんど中小企業にね、学生が行かないっていうことが問題なんだろうと思うんですけども。

公立高校の志望動機っていうアンケートをとるとね、上位に出てくるのはね、私はこういうことをやりたいので、この高校でこういう勉強したいっていう、そういう動機ってね。全然出てこないんですよ。

それでなんかね、あまりやりたいことがね、明確じゃないような感じがするんですよね。今の子供たちってね。

それから中学の頃から、キャリア教育っていうか、やりたい事を自分で考えるような学習の時間を増やしていって、そうすると少し問題意識を持って高校で勉強する。

そして、問題意識を持って大学に行ったら、志を遂げるための勉強する。

そして、その志を遂げるためには、じゃあどこに就職しますかって言ったときに、今だとどうしてもなんか企業規模とか、外聞とか、外見にとらわれて、選んじゃうんだけども。

実際に自分がやりたいことをやれるっていうのは、必ずしもそういうとこではなくてもちろん中小企業だっていっぱいあるわけですよね。

だから、本当にやりたいことが明確になれば、その学生は、中小企業だろうがなんだろうが、面白そうなところに就職する。

そういうような、学生とか生徒の意識がですね、教育の中でこう変わっていくと、企業も、学生や生徒の興味にあったような自分たちの仕事とか、事業っていうのをこうやっていく

と、来てくれるんだ、というふうに気づいて、自分、企業みずから変わっていくと。
なんかそういうその学生の意識の変化、それと、企業の変化、この２つの変化が絡み合ってくるとですね。だんだんと、京都で学んだ学生が、京都の中小企業に入っていくようなね、ことになっていくんじゃないかなっていう感じがしますね。
教育の話だから、ものすごい息の長い話なんで。
そういう、私たちもそういう志を忘れずに、継続的なそういう教育をね、していくことが大事なんじゃないかなというふうに思っております。

（安岡委員）
少子高齢化ということで、2025 年とか 2040 年問題。これ出てきますけれども、連携っていうのは、本当にキーワードと思うんですね。
医療において、別にもうそれは、医療、介護、福祉、これの連携が必ず欠かせない。
そこに地域住民っていうのが入ってくるわけですけど、そこに焦点当てなあかんわけですけれども。また、あと病診連携、多職種連携、そういったことでやっていく時代になってきている。
そして、産官学が１つになってというか一体になって、やることによって新しい技術を作ったり、また創薬にしてもね、作っていく。その材料にしても、新しいものを開発していく。ここは本当にこれは、三位一体みたいな形でやっていかなきゃならないというところがある中で、この学校、これは魅力ある府立高校を作ることによって、学校に乗ってくる。
また、企業とか、大学、その中では、やはり入学定員を補充するとかですね、企業と働き手を確保していく。また府に対して、流出人口を減らしたりとかね。
そこまで定着できるようなっていう、ここの 3 つ三方良しの考え方デイケアの連携ってのは、非常に大事なことであるけども。その根底にあるのはやっぱり、子供たちだと思うんですよね。
その高校生がそれを今回、今後その生涯にあたって、どういうふうに持っていくかというところをやっぱりそこは見てあげなければならないというところ、そういうのがある。
或いはですね、やはりその、連携をすることによっていろんな共同研究作業、コロナ禍からあいていますけども、高大連携で合同学習、これを実施することによってということはそこに参画して、ある意味でエキスパート的なもう人を作ることができるのであれば、その大学に入るのに、優遇措置をするとかですね。
それとか、企業に入るのであれば、どう足かせは足かせというか、そこの部分に対しては成績を少し割り増しにするとかいうことで、優先的に入れてあげるっていうふうな、こともやっぱり必要なのを、要するに整備してやる、子供たちインセンティブを明確にして見せることによって、そういった連携がもっと、繋がっていくのかなというふうには思いますし、大事なところではないかなと思います。
それを言えばですね、逆に、高校教育のあり方っていうのと、それが大学に浸透していっ

て、そこの中身まで入っていこうと、どこでこれ境を決めていくところなのかなあというが中学までは、ね、教育としてあって、高校、大学って進むにつれて、そこで何を見ていくか。そういったところが非常に明確になってきているような気がするんですよね。

その中で、まずそのどこどこに対してはもうそうですから、そういったところに対して飛び級をしてあげるとか、そういったところでは、できることはもうどんどんどんどんそういった形の、取っていくっていうのも大事であろうし、また、企業の中にもそうやって人材ができるかなっていうふうに思うんです。

一昨日の新聞の中で、森翔太郎さんですか。野球選手。アスレチックの方にマイナーリーグで契約したとか、急に飛んだんですよね。それが成功するかどうかは別としてね。

いろんな意見があるでしょうけども、そういった中でそういうチャレンジできる環境づくりをもっともっと大学も、企業も、そういうことはやってやることによっては、子供たちがああいう世代が広がるということをやはり、その連携の中では考えていっていただきたいというふうには思います。

（鈴鹿委員）

高校と大学との連携についてなんですけど、これ本当にやはり公立の学校で一番大事な視点が、底のところの部分を必ず拾い上げるというそこが公立の意味だと思うんですが、ただその中でも専門性を持った人が特に農業高校とかたくさんいらっしゃる中で、その方々が卒業して、一般の専門ではないところと同じというわけでは絶対にないので、そういう意味では、今回の農業高校の連携などを通じて、例えば、もちろん、普通教育の中で受けているのではちょっとそこマイナスになってる部分も、先ほども英語の部分がマイナスになってたりとかいう話もあったんですけど。

そういうのがマイナスになってる部分があるにしても、この部分はできるよということであったら、そこを伸ばして大学につなげていくっていうのは、将来的な、もう専門性を持った仕事につく人にとっては大事なことかなというふうに思っています。

そして２点目のこの企業との連携については、私も結構連携ということで、企業の立場としてもいろいろしてながら感じてることなんですけれども、やはり今、実際どう働くかのイメージがついてない生徒さんというのはかなり多いのかなと。

またその中で、長く働いていけばわかるという意識はなく、ちょっと違うなと思ったら辞められてしまうというのはどうしても課題になってると思います。

ただ企業の方では、今特に人員不足が問題になっているので、私たちとしても、特に、元々、高校卒業生をよく工場とかでは採ってたので、そういうものにとっては特にこの企業との連携というのを、こういう機会があったら、ぜひ参加したいなというふうに、企業側としても思いますし、ただちょっと、後程でも教えていただく募集っていうのはどういうふうに企業募集されているのかなと。

多分、社内でもこれ上がってきたらじゃあこれ出たいですっていうところが多いだろう

なというのを持って、またそこで選べる企業というのが増えたら、高校生にとっても選択肢が増えていいのかなというふうにも思いました。

その中で、先ほど言った、そのミスマッチによる退職っての本当に多いんですが、インターンなどを通した人というのは、結構退職しないと。

そして、インターンを通して、最初はちょっと違うなって、でも学校に言われたので来ましたっていう方でも、結局インターンを通した中で、やっぱりこっちが合ってましたというふうに言って、志望変えられて、長く続くというケースをよく見てきています。

そういう意味でも経験していくというのは大事だと思いますし、私たちの企業の場合、特に今、障害者の就労支援も結構してるんですが、そういうとこになると、しっかりと適性を見て、お互いマッチして働くということをしていると、本当に長く勤めていただいて、また適正もあって、特にコロナの時期にはそういう支援学校からの、就職して入ってこられた方っていうのがめちゃくちゃ大きな底力になってたんです。

そういうこともあるので、やっぱり経験するっていうのはとにかく大事なのかなと思うので、いざ入ってしまうという前に、こういう連携というのはたくさんしていただきたいと思います。

これは、高校との連携とはちょっと違うんですが、先日確か、先端科学大学でも学生が企業の出す課題にこたえて、いろいろ課題解決をするというのをやってたと思うんですけど、そういうような試みって、実際の企業の方が何を課題に持ってて、自分たちが入ったら、これを解決できるんだっていうふうに、実地でやっていくというのは先ほどの例にも少しあったと思うんですけど。

この部分っていうのは、企業にとっても学生が何を考えてるか、知る機会になって、学生さんにとってその課題っていう、どの業界が抱えてる課題も知れるというので、例えば、これも一種の探究型のっていうのはさ、こういうっていうのは、本当に必要かなというふうに思います。

特に人員不足でいうと、どうしても中小企業に行かないという話もありましたが、正直、いろいろ募集出しても、そういうところで言われるのは、中小企業だと、お休みが少ないとか、お給料が少ない。少ないところはないかもしれないですけれども、大企業に比べるととてもそこにかなうことっていうのは、中小企業はそれで競争しようとすると絶対にできないので。それでも、こんな面白いことは生涯の仕事にできるんだよっていうのを紹介する、じっくり見てもらう場っていうのが必要かなというふうに思っています。

（藤本委員）

失礼します。

まず最初の高大連携のことですけど、先ほど、どなたかもおっしゃいましたけど、なんて言うんですかね、公立高校は割と、京都府なんかも多いですけども、大学になるとやっぱりまた私学がかなり多くなるっていう、この設置者の違いというものが難しいというのが１つ

ありますよね。

ただ、やはり少子化ということを逆手に取れば、大学だってやっぱり、早く学生を確保したいのは経営的に私学はさらにそうでしょうから。そういうところをうまく利用するって言い方は良くないですけども、お互いがウィンウィンになるように、これが安易な学生の青田刈りに繋がるようなことがちょっとよろしくないと思うんですけども。

やっぱそういう意味で、ここをぜひですね、チャンスをとらえながら、いわゆる高校と大学の連携というものにさらに強化していくべきだなというふうに思うんです。

その具体的なところとしては、例えば、連携っていうと、何か、あんまり、なんかこう、大人同士がやってるみたいなイメージあります。やっぱ生徒同士の、本当にいい意味ではこの内容も含めた接続的な、さっき小畑委員も大事なこと言ってくださいましたが、そういう本当に各学校施設が上の校種と結んでいくときに連携から始まるんですけどやっぱり接続という、内容そのものを結んでいくみたいなね。

幼少なんかも、連携から接続っていうことが今もう盛んに言われますが、つまり、その学習内容なんかも接続していくみたいな、そういう、こう考え方、実際の現場の工夫っていうのが要るのかなって思います。

でも、それを実践しようとすると、圧倒的にやっぱりゆとりがいると思うんですね。高校現場なら高校現場に、これも生徒さんもそうだし、教員もそうだと思いますそういうゆとりなり隙間時間が作られないと。新たなものを入れるっていうのはなかなか不可能ですから。

この辺を本当に真剣に進めようと思ったらかなり思い切った、もうここは大学的なことをやろうみたいなね大学の先生に入ってもらうみたいな。そういう、かなり隙間を、かなり物理的に作っていかないと難しいのかなというふうに思ったりします。

あとは、例えば僕はわかんないすけど、高校生が大学の先生の授業を聞くっていうのはとても面白いと思うんですけども、それだけじゃなくてさっきのエキスポでもそうだったけども、やっぱ身近な人の話聞くっていうことの、新鮮さであったり、身近であったり、自分ごとであったりという意味でいうと、大学生が高校に来て、いろいろなことをチューター的なところで、いろんな交流をしていく。あるいは、大学それが今学んでることとかを、生徒さんに、自分でちゃんとまた教えてあげるみたいなそういう授業を大学の先生がやるっていうよりも、なんかそういう何でしょう、厳しくないけど、大学の先生だけ授業上手い人って、限られてると思うので、高校生に魅力的に、授業できる学校でどれぐらいいるかっていう気もするので、それをごめんなさい。だけど、大学生がやっぱりそういう身近な年齢の人がやるっていうのも１つなのかな。

あるいは、大学に行って、何かそのパンフレットもらうだけじゃなくて、各色んな大学もかなりオープンスクールという意味では、工夫してると思うので、そこをうまく利用してですね、高校の方とコラボして、大学に運営を全部任せるんじゃなくて、一緒に何かそういう企画ができると、それこそ、何か大学生の授業をみんなで受けてみるとかね、それについてちょっと予備学習をして行くとか、なんかそんなふうな連携の仕方ができるといいのかな、

楽しくなるのかなという気もしたりします。

あと、高校と企業の方の話ですけども、これもさっきの話と共通するんですけど、先ほどかなり多くのね、大学があるにもかかわらず、京都の大学生もまた、首都圏の方と、特に東京に行くっていう、これはなかなか止められない。残念ながら、後ろ向きな発言になるかもしれないけれども、やっぱり少子化が止められないのと同じように、今のやっぱり東京一極集中の流れっていうのは、非常によろしくないと思うんですけどもこれ、そんな簡単に止められないんですよね。

しかも、また、最近大企業が、初任給あんな破格の値段で出してきましたから、太刀打ちできないです。いろんな意味で。東京だって、財力に物言わしてる、どんどんどんどん、やっぱりかき集めてっていうか、求心力って、これを止めるっていうのは、もちろん、言い続けないといけないので。ぜひ、西脇さんにも、知事会で言い続けていただきたいんですけども。

でも、よく考えてみたら、今の学生さんっていうのは、良くも悪くも、１つの企業でずっといないじゃないすか。いない。これもどうかなと思うけど、そういうところで、我々も、京都の学生は、京都に就職して、一生、京都に見てもらうみたいな、理想なんだけど、その現実から、もっと夢からアップデートして、現実を見たときに、東京行くかもしれないけど、また戻ってくれるようなそういうものにじゃあどうしたらいいのかっていうところに、考え方を転換していかないと。単純に京都引っ張るだけでは、なかなか数字に結びつかないなっていうふうに、思います。

だから、従来、色々されてる取り組みっていうのは、ジョブパークも含めて、すごくこうやっておられると思うんだけどやっぱり、ひょっとしたらブースを構えて、来るお客さんだけ待ってるみたいな従来型だったら、やっぱり関心のある学生が来るけど、もう関心のない学生は来ないみたいな。そんなことになりやしないかと思ったり。

あるいは、もう今、学校の就職課というよりも、圧倒的に学生さんスマホですよね。

この手の中でだけで、企業の情報集めて、自分からそういうとこに行くという。そこに、また紹介会社というちょっと厄介なところが入ってきて、これもなかなか問題だとかその辺をこういろいろこう考えていくと。やっぱり、また帰ってこれるような、そういう下地を、京都の企業さんとどんなふうに作っていくのがいいのかなっていうのも大事なところになるのではないかなというふうに思ったりします。すいません。

（千委員）

高校と京都の企業の連携ということでは、なんでしょう、あるのかもしれませんけど、いわゆるその、オープンキャンパスみたいな、オープン会社ですよね。

そういうものがたくさん、ある、あればいいなと思いますし、インターンシップっていうのはすごく大事なことだと思います。

例え、それが自分の望んでた仕事でなくてもね、どういうことをそこでするのかというこ

とを学ぶだけでも、いいことだと思うのでそういうことが浸透していけばいいなと思います。

そして、多分、高校生のうちにどういう仕事をしたいか。大学に行くにせよ、高校生の間に、ちょっと難しいことだと思うんですけれども、年齢的にも、どういう方向・方面の仕事をしたいかということを、ちょっと叩き込む。そして、それで大学を選ぶ。それに関連したことを大学で学ぶというのが、机上の空論かもしれませんけれども、大学入ってから、どこ勤めよう、全然違う学科にいるっていうわけにもいかないし。

割と漠然と今、高校に行って、大学、入ってっていう若者が多いんだと思いますけれども、やはりもうちょっと、高校の間に、少しいろいろな可能性をたくさん詰め込んで、少し自分で判断できるようになってくれたら、その先が、少し楽かなと本人にとって、思います。

それと京都への定着の話ですけど、もう仕方ないですよね。それはね。なんか、私が京都人でないからそういうのかもしれないんですけれども、例えば、新聞とかで政治家が多いかもしれませんけど、政治家とかなんか、社長交代でちょっと略歴みたいなのが出てたりすると、この人、京都出身なんだとか、京大なんだ、立命館なんだと、もう、京都に関わってたんだなと思うと、何か、東京なり地方なりに分散してても、そこで立派なことしててくれたら、京都人が、私も嬉しいです。

うん。京都にいなきゃいけないという発想は全くないのでね。

大勢、立派な京都人を育てて、全国の日本のために、あちこちで働いてもらうというのがいいのではないかなと思います。

（前川教育長）

以前は、職業教育とか、就職指導とか言ってたのを、今はキャリア教育っていうように変わったんですけど、このキャリア教育っていうことがどういうことをやっていくのかっていうのはまだまだ研究段階というか、中途の段階にあると思うんですね。

以前は、高い偏差値を取って、そして有名な大学に行って、規模の大きな会社に勤めたら人生の幸せが約束されていたと、日本人はみんな信じてたわけですけど。

今の若者は、そこに疑問を持ってる子が多いんじゃないかなと思います。

でも、じゃあ自分は何、何をしたらいいんだっていうことを見つけられない高校生、大学生が非常に多いと思うんですね。

例えば、インターンシップっていうことが大事なことだと思うんですけども、どの段階でインターンシップをやるのかっていうことは、きちっと考えなあかんと思うんです。

例えば、アメリカの、先ほど知事がおっしゃった事例で言いますと、大学生がやっぱり企業の中で研究したりとか、大学生の時期の企業との学びの共有性といいますかね、そういうことは、すごく職業には繋がっていくと思うんですね。

京都府の場合は、大体、府内高校生の７割が大学に進学します。

残り３割のうちの、大体２割ぐらいは、高校から企業に就職するんですけども、こういう

子たちはやっぱりインターンシップを積極的にやっていますし、学校もそういうふうに進めています。

ところが、大学に行く子供たちに対して、高校時代にインターンシップが本当にできるのかっていうことでいうと、私はちょっと疑問を持ってまして。

それよりも、例えば企業との関わりでどういうことをお願いしたらいいのかなって考えると、面白いことを見つけたいと思ってるんですよ。子供たちって。できたらそれを職業に結びつけたいなと思ってるんですね。

でも、見つける機会とか、場面をなかなか、学校教育だけでは用意できてないという現状があります。例えば、先ほどの探究的な学びですけども、企業の方達にそこで関わっていただくことによって、この企業に行くと、こういうふうなことをやるんだとか、あるいは憧れ、仕事とか、その人物に対する憧れってのは、やっぱ出てくると思うんですね。

そういうことが、子供たちの将来にとって非常に大きな要素になるのかな。

それは、大企業だからとか中小だからということではなくて、子供たちに、働くこと、あるいは研究すること、そういうことの憧れを見せていく、持ってもらえるようにする。

そういうことを、高校段階ではやっぱりやっていくのが、キャリア教育としてはいいのかなあというふうに、私は個人的に思ってるんです。

先ほどありました、探究的な学びのところに、大学の先生よりも、大学生をチューターでって、これも研究とか学びっていうことに対する、身近な憧れを、作っていくっていうことだと非常に有効だと思うんですね。

京都府は、どちらかというと、大学連携に強いんです。京都市は、企業連携に強いんです。

高校教育で言いますとね。これは、もともと、京都市は工業高校ですとか商業高校ですとか、専門学科の学校をたくさん持っておられて、就職する子も多かったので、企業さんとの結びつきは非常に強いですね。その結果、今、高等学校コンソーシアム京都っていう組織を京都市はお持ちなんです。

我々は、その部分でいうと、はるかに京都市よりも遅れているんですね。

ところが、大学の先生方の結びつきで言うと、我々、非常に強いものを持ってる。

先ほど府市連携がありましたけども、府と市の強みを持ち寄って、それから、子ども達のキャリア形成、キャリア教育っていうのを、どうやっていくのかっていう、企業人の大学人も含めて子供たちに、憧れを持たして、そして、これ面白いなと思わして、それを職業に繋がっていく。

そしてそれは、最終的に例えば、地元の企業に就職してくれたり、一旦出たとしても帰ってくるようなきっかけになっていくっていうことが、高等学校、京都府の特徴で言いますと先ほど申し上げた、７割の大学に行くっていう特徴から考えますとね、非常に有効な政策かなあ、考え方かなというふうには思います。以上です。

（西脇知事）

ありがとうございました。

私もずっと、市長とのあれでは高大連携、企業連携言うてたんですが、これちょっとこの言葉自体は、実は手法を言ってるだけで、何をしたらいいかというのがわからないので。

ちょっと、まだ次の、いつかわからないですけど、新しい展開を市長と話すときにっていうふうに考えてて。

今、お聞きしたのも、まさにその通りで、やっぱ目的がですね、まず高大連携といっても、教育長おっしゃったように、本当に高校で就職する人にとってもインターンシップだから、もっとこう非常に合目的ですし、学校によって、専門的な教育学科の場合は、もうかなりですね、その典型としてというのが、農芸高校と府大の連携がより形になったというふうに思ってます。

一方、そうじゃなくて、ちょっと憧れということで出ましたけど、企業との連携も鈴鹿さんみたいな、採用したいからみたいな話ですね。

いや、漠然とでもいいけれどもどういう仕事にしたいとかどこの会社じゃなくて、どういうふうに職業に就きたいかっていうのを考えるきっかけとなると。どういう人に、企業との連携っていうときに教えてもらったらいいのかとか、ちょっとこれもう少しですね、何のためにどう、何をするかっていうのは、整理する必要があるのかなっていうことを、まずは率直に感じまして。

それで、ただ、私も、できる限り、幼稚園のときは、逆に言えば、保育所・幼稚園の場合は、基礎的な生きる力を着ければいいんですけど、できる限り社会がどんなもんになってるとか、社会との繋がりを早めに学べばいいんじゃないかと、

子育ての関係で、京都版ミニミュンヘンていうのお願いしましたけど、ミュンヘンでやってるのは、社会性とか、自覚とか、独立性を、伸ばしてるはずなんで、だから２年に１回ですけど、３週間、約 2000 人の子供が自主的にまち運営してるっていう。それを通じて、いろんな職業に就くっていうイメージを持たすみたいなことになってるんですけど。

最近、京大発ベンチャーの、急成長してる経営者の共同代表に聞きましたけど、もっと早く３年生だったらもう終わりですからと言ってましてですね。

忙しくなってですね、特に理系は問題ないんじゃないんだけど、もう１、２年生の間に、もっとこう社会のことを勉強してもらって、気がついたら、３、４年生忙しくて、修士のおわりになったら、企業も調べないで、50 社以上のエントリーシートをかけなきゃいけないって言ってましてですね。

なんかそういうことがあるんでできるだけ早く憧れということがいいかどうかは別にしても、いろんなことを学んでいただいた方がいいっていうのは、私は間違いないんじゃないかなというふうに思ってまして。

藤本委員からも千委員からも言われました、京都人として活躍したらいいっていうのはこれ、実は、京都の府内の大学生は 19%とか 17%台とか府内定着率でいってててですね。

ここで議論したら河島さんが、何%だったら雇えるんですかって言われて。すみません。

３割、４割残ったって、残るわけないわけですよね、企業の受け皿がないわけですから。
だけど、結構、転勤の希望先に京都で書く人が多いんですよね。
特に支店長クラスだったら、ぜひ京都で、京都にゆかりのある人はですね、なしでもいいんですけれども。あとそれから、家庭を持つなら京都だって言う人もいるんで、できれば、もちろん京都人として全国で活躍してもらえばいいんですけど、一生に何回か別に京都で働くということもあってもいいし。実は、ベンチャーとか、スタートアップでも、京都で起業したいっていう人が結構多くてですね、だからその辺の繋がりを守ってもらうっていうの、多分あるのかなというふうに思ってまして。
ちょっと高大連携・企業連携は手法を表す言葉なんで、もう少し、我々自身も深めていきますし、それから先ほどの説明の中で、全然活用されてない制度については、１人ってやつある勉強の余地がありますんで、よろしくお願いしたいと思います。
以上で終了いたします。